

第一声

山田真砂年

日照雨過ぎ島に匂へる葛の花

眼つむりて顎ちよとあげて銀木犀

虫の音のコップあふるるやうにかな

鼻先をぶんと過ぎりて鬼やんま

秋風の運河を吹けば真つ直ぐに

月光の野面や背高泡立草

コロナ癒えず月の桂に風ぞうぞう

外套の襟立てナフタリン匂ふ

返り花一人の時に気づきけり

星辰の滲んでゆけり大旦

曙は海より来たり注連飾

鶏日の第一声をはぎれよく